

論文の内容の要旨

論文題目 アンドレ・ブルトンにおけるオートマティスムの概念とその変遷

氏名 中田健太郎

本論文は、アンドレ・ブルトンにおけるオートマティスムの概念を主題としている。オートマティスムは、さまざまなシュルレアリストの実践と結び合わされ、ブルトンのテクストのなかで語りなおされるうちに、理論的展開を刻みこまれた語彙であった。本論は、この概念が年代ごとに変化していく多義的なものであったことを確認しながら、その変遷の過程をあきらかにするものである。

「オートマティスムとは何か」という問題は、研究史の初期から大きな懸案として問われてきた。ブルトンのオートマティスムの概念が精神分析に大きなインパクトを受けていることはたしかであり、フロイトの理論を起源と見なす研究は昔から数多く行われている。あるいは、19世紀末の精神医学の文脈の影響もつとに指摘され、ピエール・ジャネの『心理的オートマティスム』（1889年）のような著作について検討がなされてきた。ブルトン研究の初期には、オートマティスムの理論的源泉は精神分析なのかそれとも精神医学なのかという問題が大きなトピックをなし、理論的起源をめぐるある種の争奪戦が演じられたのだ。

そのような起源探しにたいする反動もあり、1980年代以降のシュルレアリスム研究の理論的に先鋭な部分においては、オートマティスムはしばしば原理原則にすぎないフィクションとして棚上げされるようになった。そのような傾向を代表していたのが、1992年に出

版された『夢の砂のなかには風を掬うシャベルが』という論文集であり、とりわけミシェル・ミュラによるその序文であった。ミュラは、それまでの研究が「オートマティスム」のような原理原則にこだわってきたことを指摘して、彼らの研究はむしろ実践としての「エクリチュール・オートマティック」や、生産物である「テキスト・シュルレアリスト」の読解に向かっていることを強調したのだ。

「オートマティスムとは何か」という問いをとりあげなおす本研究は、しかしあえて反動をおかそうというのではない。本論は、オートマティスムを一つの理論的起源に結びつけてきた過去の研究史への反省を踏まえながら、それがむしろ多様な言説と結びつき、またさまざまな方法論を含みこみながら歴史的に形作られていった概念であることを、あらためて肯定的に論じるものである。移り変わっていく概念というのは一貫性のないものとして批判されがちだが、本論は歴史的に構成されていく理論的言説のありかた自体をアヴァンギャルドの理論とは異なるものとして評価する立場から、オートマティスム論の変遷について検討したのだ。

まず第一部では、シュルレアリスム運動以前のオートマティスムの概念をあつかい、ブルトンがこの語彙を用いはじめた当初に意識されていた語義について確認している。フランス語における「オートマティスム」という語彙が、デカルト哲学の注釈の歴史のなかで広まったものであることに留意しつつ、それが実験心理学や精神医学の文脈でどのように用いられ、またフランスの精神分析受容においてどのような役割を果たしていったのか、具体的な分析をおこなった。その過程で、「オートマティスム」という語彙が、機械論的とも生氣論的とも言えるような、また唯物論的とも観念論的とも言えるような、対立する思想を複層的に同居させるものであったことを確認し、以後の検討のための理論的な足がかりとした。

第二部では、「オートマティスム」という語彙が、ブルトンの「霊媒の登場」（1922年）において「シュルレアリスム」の同義語として用いられはじめ、やがて「シュルレアリスム宣言」（1924年）のなかで運動を定義する言葉として定着するまでを検討した。「霊媒の登場」においてブルトンは、心霊現象にかんするスピリティスムの原則は否定しながらも、その実践に由来するような経験的現実の外部からやってくる声の表象を、テキストのなかに大量に用いていた。「シュルレアリスム宣言」においては、スピリティスムの文脈を隠蔽しながらもその表象を部分的に引き継ぎ、さらにコラージュをも含めた当時の詩的関心を統合するようにして、シュルレアリスムの問題領域を語っていくことになる。このようにして「シュルレアリスム」は、「オートマティスム」よりも大きな概念として拡張

していき、一方で「オートマティスム」は、そこにすべてが還元されるわけではない原理原則として提示されはじめたのだ。

第三部は、アンドレ・マッソンやマックス・エルンストのオートマティスム理解を参照しつつ、ブルトンの「シュルレアリスムと絵画」（1928年）を主な分析対象としている。シュルレアリスム運動内外の多くの批評家たちが、オートマティックな絵画とイリュージョニスティックな絵画を対比させながらシュルレアリスム美術について論じたのにたいして、ブルトンはオートマティスムによってシュルレアリスム絵画の領域を規定することはしなかった。むしろ、デッサン・オートマティックを含むさまざまな方法論を列挙することによって、シュルレアリスムのあつかうべき美術の問題を語ったのだ。それにたいして「オートマティスム」という概念は、「シュルレアリスムと絵画」においては、特定の方法論的言説と結びついた原則として提示された。

第四部では、主にブルトンの1930年代のテキストを検討した。30年代のオートマティスム論は、能動的な理論へと修正され、テキストの解釈に目が向けられるようになったとしばしば評される。とはいえその実践は、主体的経験の外部にあると思われた言語を主体の内部で反響させるという、われわれがこれまでに検討してきたオートマティスムの問題の延長線上にあるものとも考えられる。そこで本論は、30年代のオートマティスム論を決定的に修正されたものとしてではなく、オートマティスム概念の蓄えてきた多義的な要素をさまざまに展開したものとして検討した。それは、唯物論的かつ観念論的なブルトンの思想のなかで展開され、換喩的かつ隠喩的な性質をともに含みもつことによって言語論としてのダイナミズムを有していたのだ。

最後の第五部では、1940年代以降のオートマティスム論をあつかい、とりわけ「絶対的オートマティスム」という用語がさまざまな方法論的言説をまとめあげるものとして定着していったことを確認した。「絶対的オートマティスム」は、物質と精神の認識論的關係を強調するものであり、その実践者たちはしばしば疑似科学的な理論にもとづきながらこの認識論を多様化させていった。ここではとりわけ、オスカル・ドミンゲスの「リトロクロニスム」と呼ばれる理論をとりあげ、それがブルトンの客観的偶然論と連続したものであったことを確認した。またブルトン自身の晩年のエクリチュール・オートマティックも、唯物論的でも観念論的でもある言語観にしたがいながら、対象と精神の認識論的ドラマを提起したものとして読むことができることを検討している。

このようにしてオートマティスムは、複数の言説によって多重決定された概念として展開することによって、年代ごとにその成果をあげてきた。本論は、「オートマティスム」

という概念が多義的な広がりを持ちながら歴史的に変遷してきたことを検討しつつ、その意義を肯定的に評価しはじめようとするものであった。